

農林水産大臣 林芳正

トウモロコシも可能性を追求してみるのは面白い

本誌はこれまで、昨年から起きている高米価の要因が戸別所得補償制度であることを説いてきた。過剰な助成金の取得を動機とする飼料用米や新規需要米への大幅な作付転換が、主食用や加工用のコメの需給バランスを崩すほどに働いてしまっているのだ。コメの関連産業を脅かすこうした問題と、それを解決する新たな可能性として水田で子実トウモロコシを生産することについて、農林水産省の林芳正大臣に本誌編集長の昆吉則がインタビューした。

(取材・まとめ／窪田新之助)

子実トウモロコシの可能性

昆吉則(本誌編集長) 今日ご提案したいのは国産の飼料用トウモロコシのことなんです。事前にお渡しした資料の通り、北海道長沼町の柳原孝二君という農業者が昨年作ってみてみただけです。

林芳正(農林水産大臣) 柳原さんは、A-1グランプリ(主催・農業

技術通信社)で優勝されたんですね？

昆 そうなんです。日本では肉食がここまで進んできたにもかかわらず、水田利用はコメ偏重で来たことを振り返れば、これまでの政策はなっていないかと思うわけです。単に自給率の問題だけではなく、これから円安・ドル高が進めば、海外から餌を調達することが困難になる事態が本場に起こりうるのではないかと。そのときに不足するとなれば、

それはやはりトウモロコシだろうと危惧するんです。だから国内で作ることを見直しを考えるべきではないかと。

林 水田で飼料用トウモロコシを作るといいますか？

昆 この資料を見てください(30ページ参照)。一番上が日本のトウモロコシの現状です。収穫面積は68ha。

韓国ですら1万6000haで作っている。アジアのコメ食文化の国々を増産しているんですよ。EU諸国にしてもですね、輸入はしながら、国内でも生産しています。

林 なるほど。

昆 気象条件からすれば、トウモロコシの収量はオランダやドイツより日本のほうが、北海道を除けば上げられる可能性がある。それ以上に、

それを実現することで水田農業のイノベーションになるのではないかと。

実は明日ですね、岩手・花巻の読者の農場で餌用のトウモロコシをまくんです。近くの読者が外国製のコンバインを持っているのですが、彼らは国産の汎用コンバインを持っていて、秋にはそれでも収穫します。まあ、それでトウモロコシを収穫するのはまだなかなか難しいんですけどね。

林 トウモロコシは汎用の範疇(はんちゆう)に入っていないわけですね。

昆 その技術開発には独立行政法人の研究機関にも支援してもらいたいです。これはTPP対策にもなります。もし日本がTPPに参加するとして、自由化までには10年はある。それまでにコメだけでなく、経営全

体として機械の利用頻度を高めていくことが、水田農業経営を強くしていくこととなります。5年、10年すれば放っておいても高齢者は離脱しているわけですから、規模は自然と大きくなる。それまでにプロ農家に餌用のトウモロコシを作ってもらえばよいのではないかと。

林 面白いアイデアですね。

昆 このことは日本のコメ農業を強くすることにもなるんです。コメだけではなく、穀物経営全体、水田農業全体のコストダウンになるんですから。

林 なるほど。コストダウンになればいいですね。

昆 従来の専門家たちは日本でトウモロコシを作るとは想定してこなかった。あくまでも食用の麦や大豆だけで。今だからこそ、未来から逆算してチャレンジできることをやるべきですよ。

林 やってみれば可能性は見いだせるといえるものがあるのではないかと感じますね。

昆 今、トウモロコシに取り組んでくれる人たちは、彼らのリスクでやってくれるわけですよ。大手機械メーカーにも協力を依頼しているところですよ。今年4人やるんですが、来年は30人くらいにお願いしてね、それで6次産業化の予算か何かを利

用できないかと思っています。

林 「ウスケボーイズ」というワインはご存じですか？ この間、知り合いからもらったんです。要するにワイン用のブドウというのは国内では作ってなかった。というか、作れないと言われていた。それを、山梨や長野の人たちがいろいろな努力をされてね、今は堂々と作っていらっしやるわけですよ。だからトウモロコシもですね、今まではできないと思ってきたけど、まあ、やってみればいろいろな工夫次第でできる可能性はあるんじゃないかと感じます。

昆 日本も1960年の始めごろまでは、トウモロコシを11万t作っていたわけですよ。それが選択的拡大のなかで、一気にゼロに近くなってしまった。それ以来ずっとそのままなんです。

林 マクロ的な視点で見れば、日本水田では食用のコメを作っているところが3分の2。残り3分の1は主食のコメ以外のものを作る、と。稲のホールクロップサイレージ(WCS)もあるし、米粉もあるし、餌米もある。トウモロコシも餌米を作るのと同様と考えますが。

昆 いや、コメとトウモロコシは飼料としての価値からすれば、トウモロコシのほうがずっと上ですよ。

林 そうではなくて、マクロで水田をどうするかということ。こっちは余っている、こっちは足りない。だから、水田でできる飼料という意味でね、今から何を作るかよく考えなくてはいけないね、ということですよ。この間、面白い話を聞いたんですが、コメを生のままではなくて、炊飯して家畜に与える。そうすると、また違ったコメの効果が出るみたいですよ。そのような取り組みがあるなか、いろいろなことをやってみて、トウモロコシも一つの可能性を追求してみようというの面白いと思います。

昆 特にこれまでの日本農業はコメに偏重してきました。コメが一番偉いんですよ。農家の間では、餌を作っていることは身分が低いという雰囲気があるんです。

林 今は、コメだけじゃなくて、野菜や花を作ったりしています。長い歴史のなかで、日本の風土に最も良く合っているのがコメで、ずっとメインであったのは当然だと思えますしね。

昆 たしかにそうですが、ただ、あの時代からは政策的にコメに誘導してしまっただけで、水田農業ではコメ以外もあり得るのに、その可能性を無視してききました。米価を維持するための減反があつて、そのための麦や大

豆になっています。僕は「減反なくすべし」という立場でして。EUのような直接支払いもあるわけですから。

北海道の柳原君は、交付金の3万5000円があるならトウモロコシは1kg50円で売れば、それで利益が出るというんですね。今、配合飼料の購入価格は67〜70円しているわけですから。彼のところでトウモロコシの反収は700kgから800kg。でも、頑張れば1tから1.5tまでは伸ばせるでしょう。そうなればコストは半分になり、海外と競争力を持ちうる場面も出てくる、と。

昆 これからのドル高、そして国際的に餌用のトウモロコシが逼迫するだろう事態を踏まえれば、国産があつていいことじゃないかなと思います。

林 私はドル高よりもトウモロコシの需給の逼迫のほうが心配です。為替はどうなるかわかりません。日本と米国の相対的なポジショニングの問題なので。これからずっと米国が強、日本が相対的に弱いというのは想定しにくく、ドル高・円安という前提で見ていくのは難しいかも知れません。

昆 いずれにしろコメと麦、大豆が逼迫することはそれほど考えにくいです。ただ、トウモロコシは間違いな

く足りなくなるだろうと思います。
林 それはマクロで世界の人口がどうなるかとか、所得が上がった国や地域が肉食に向かうかも関係してきますよね。為替がニュートラルだとしても、中長期的にはいろいろな取り組みを考えなければなりませんよね。

昆 チャレンジする農業経営者がいるものから、そのチャレンジを応援するように、農水省あるいは国として対応していただければと思います。彼ら農業者がやれば、世の中は良くなると思いますので。

林 水田にコメだけとは言わず、いろいろなことに取り組んでいくのは私も大事だと思いますね。

米政策改革大綱のその後

昆 続いてうかがいたいのは、自民党政権だった2002年に出された米政策改革大綱のことです。これについて、私は当時、歓迎するという記事を書いたんですよ。しかし、その後政局が変わるなかでこの大綱の理念というものが消えてしまったのではないかと。そして、農政は10年や20年は逆戻りしてしまっただろうに思うんです。あれはコメの生産流通にマーケットメカニズムを機能さ

せながら、農水省がやるのではなく、生産者や生産者団体が自ら減反やマーケティングしなさいということでした。JA全中や自民党の農林部も認める格好で出たわけですよ。今、大臣になられて、これまでを振り返ってどう思われますか？

林 当時の状況とはだいぶ変わってきていますが、私は、今のコメ政策が逆戻りにはなっていないと思うんですね。たとえば、消費者に売れるものを作ろうと、銘柄化が進んで、「つやひめ」が「コシヒカリ」に負けないくらいにきていますね。改革の速度についてはいろいろな議論があるので、方向としては間違いないと思うんです。当初の目的に向かって進んでいくと思います。コメの価格が高すぎるとか、流通に問題があるんじゃないかという指摘もいただいています。生産調整についてもペナルティーかどうかという議論がありますが、インセンティブは面積ベースから数量ベースに変わってきたわけですよ。一方で、野菜や果樹については何もないところである程度の需給の見出しを出してほしいという人もいます。

昆 私は、それもやるべきじゃないと思う。麻薬中毒ですから。

林 その見通しをマクロでやったほうがいいのか、保険でならすのかは



林芳正

■プロフィール (はやし・よしまさ)

1961年山口県生まれ。1984年東京大学法学部を卒業後、三井物産株入社。91年ハーバード大学政治学大学院特別研究生として渡米。92年9月ハーバード大学ケネディ行政大学院に入学。93年2月に父の林義郎大蔵大臣から政務秘書官に任命されて帰国。94年6月ハーバード大学ケネディ行政大学院修了。95年参議院議員選挙で初当選。99年大蔵政務次官、06年内閣府副大臣、08年防衛大臣、09年内閣府特命担当大臣などを経て12年12月から現職。

米政策改革大綱の要点

項目	内容
減反	減反面積の配分から生産数量を調整する方式へ転換すること、実効性を上げて、コメの余りを防ぐ
流通	計画流通制度を廃止し、自由にコメを売れる仕組みに変更
転作助成金	全国一律の要件と単価を見直し、地域の発想と戦略に基づいた転換体制を整える

※農水省の資料「米づくりのあるべき姿に向けて～米政策改革大綱のあらまし～」から作成

昔から議論があります。ならずとくに、今、果樹の災害が出ていたのに、共済には3割ぐらいしか入っていただけなにかいろいろなことがありますが。やはり、米政策改革の方向でできることをきちつと進めていくということだと思います。

昆 今の戸別所得補償制度は減反政策とリンクしていますね。需給調整を国がやっていることについては、どうお考えですか。国ではなく民でやろうというお話だったわけですけども。

林 仮の話として、数量の調整を、マクロで、たとえば作況指数もやめてしまつて誰がどれくらい作るかも全く分からずにすべて市場のままに任せるといふならば、それは逆にい

高米価の問題

えば、独占禁止法が想定するような事態を招きかねない。独禁法がなぜできたかといえ、すべてをプレーヤーに委ねたときにどうしてもひずみが生じてしまう。それを調整することをしないと、いろいろなひずみが起こるので、そうならないようにということですね。先ほどのコメの価格が高すぎるとかの指摘にしても、そうした事態が起きることを心配しているわけでしょう。丸裸でプレーヤーだけでやるというのは、今、普通の工業製品でもないと思えます。

昆 たしかにJ A全農のような組織がありますからね。

昆 米政策改革大綱ができた02年の段階で10年までに段階的にその変化をしていこうというのは、非常にいい考えだと思つたんです。

林 段階的ということであれば、先ほどお話ししたように、今は面積ベースから数量ベースになり、流通も規制はなくなり、相対でやるということですから、進んできているといえるのではないですか。

昆 いや、国によるコメの生産や流通の規制は別の形で残つてしまつて

います。たとえば、弁当業界が窮状を訴えているそうですが、昨年彼らに起こつた事態はよく分かるんですよ。あるいはせんべい屋も同じような状態にあります。

林 それは米粉のことですか？

昆 いや、米粉ではなく、くず米を使っています。ご存じだと思いますが、昨年、くず米が足りなくなつたんですよ。驚くことに主食用より高いくず米が出てきた。つまりは減反が効き過ぎてしまつたんです。新規需要米には10 a当たり8万円支払われるわけですから、コメの生産がそつちにシフトしてしまつた。おまけに、昨年はコメの品質が良かったもので、昨年から網下が少なかった。それで逼迫してしまつた。弁当屋さんとか安い外食屋さんとかのご飯はかなりひどいものを使つているんですよ、米価が上がつたから。そういう安い需要のある店のコメがですね、より安いものになつちゃう、と。それで弁当はまずくなる、外食のご飯はまずくなる。「貧乏舌」という言葉があるそうですね。

要は、おいしいコメとまずいコメの区別がつかないということだそうですね。今のような状態が続けば、海外のコメがどんどん入つてきちゃうということになりかねないんですよ。

安くて、そこそこのコメを作るのが大切なんです。国の農業試験場は減反政策以降、多収米の開発をしてくれませんでした。一方、民間企業はハイブリッドで1tぐらい取れる品種を開発している。この品種を関東から南の読者に作つてもらいました。それをおいしい米に混ぜれば、そこそこの味になるんですよ。特定の品種だけを単品で使う店はありません。どこも混ぜて使っているわけですね。

林 私が独禁法と申し上げたのは、本当に全部自由にしてくださいとなれば、大きいところがどんどん大きくなつてしまふ。生産だけでなく流通のこともあるわけですよ。

昆 コメというのは産地の多様性、品種の多様性がありますから、シンプルには独占できないですよ。心配だとおっしゃられるけれども、なぜ農協がこんなに集荷率を減らしているのか理解できません。

林 今の状況がそうなつていふわけではなくて、あくまでもそうならないうちに抑えるために独禁法があるわけ。実際に工業製品では起こつていふわけですね。そういうところも含めて、米政策改革の方向に沿つて着実に進めていくということだと思つています。

昆 今の話にかかわるんですが、自

民党としてですね、いつてみれば高米価誘導策といいたしよか、米価を高く維持しようとする勢力がありますが、これは日本のコメ農業の自殺行為だと思っんですよ。高ければ海外から入ってきまして。日本は安く作る能力を持つているんです。僕はTPPに賛成ですが、それはちゃんとやっていけば心配ないことであって、今のように高米価を維持していたら危ないと思っんですよ。

国際化時代の水田農業

林 その点はちょっとお聞きしたいんですが、日本で現在のGDPレベルや水田の規模で、収量の高いものを作ることによって、本当に競争力が出ると思っますか？

昆 品質も含めて十分に出ると思っますね。それと農地を集積してない、規模が小さいから勝てないと言っますが、うちの読者は稲も麦も大豆も種をまくまで作業は同じなんです。あるいは水を入れて湛水の直播をしたり、代かきをしないで田植えをしたりするんですよ。

農家だけでなくコメにかかわるすべての人々がどれだけ努力するかしかないでしよか。そのためにも農業構造改革を進めないといけな

し、水田のイノベーションが起きないといけな。

林 選択肢として飼料用米だつてあるし、トウモロコシもあるというところでしよか、そこは需要に合わせるといふことになると思っます。

昆 コメの量が減つたとしますよ、でも、水田農家がトウモロコシや大豆で飯を食えたらいいじゃないですか。新しい時代の水田農業経営がどう成立するか。これと中山間地対策はまた別の問題です。

林 やっぱりトータルで考えないといけないでしよか。

昆 どうしてもコメ偏重になると、そこから自由になることが大切でしよか。

林 あまり目くじら立ててコメが駄目という必要はないと思っます。

昆 もちろん。ただ、減反している100万haでトウモロコシを作りましようよ、と。全部でトウモロコシを作つても、国内需要の1割を満たすほどにもならないんですよ。それでもご提案するのは、水田の可能性を拓くために餌を作るべきじゃないかといふことだからです。

林 いろいろと試して、可能性を引き出していくのは大事でしよか。

昆 それから僕は、メイドバイジャパニーズで和食マーケットを作ろうと言っているんですよ。和食といふの

は白いご飯なんです。和食を世界に広めれば、日本のコメの価値を外国人にも認知してもらえらるんではないかと思っんです。

林 マーケットを広げていくというお考えには私も賛成です。私は「FBI戦略」と言っていますが、農林水産省として、メイドフロムジャパン、メイドバイジャパン、メイドバイインジャパンの取り組みを進め、日本食のマーケットを広げる方針を打ち出したところでしよか。

昆 外食産業は大戸屋が東南アジアで伸びているでしよか。あれはすごく意味が大きいんですよ。タイではチェーンの和食の店舗が出ているわけですよ。白いご飯を食べさせることで海外に良食味のコメマーケットができる。それが日本農業のチャンスです。

林 現地では所得



を増やしているから、今度はあの人たちの舌が肥えてくるわけですよ。だから、ホットケ定食がインドネシアで流行るといふ話が出てくるわけですよ。私はもともと商社にいましたので（笑）

昆 そうでしたかね（笑）。ありがとうございました。